



連載

常陸時代の佐竹氏

— 500年の軌跡を追う —

「五本骨扇に月丸」  
の佐竹氏家紋

## 【第7回】

## 佐竹氏家紋誕生の地・「古多橋駅」

佐竹紋、源頼朝から  
「古多橋駅」で賜る

栃木県宇都宮市の栃木県庁から「中央通り」を宇都宮市役所へ車で向かう。市庁舎近くの宇都宮城址公園脇の「本丸西通り」を通り、交差する「平成通り」を左折。一つ目の宇都宮中河原郵便局前の信号付き交差点を右折し、住宅街に入る。この道が近世の「奥州道中」、通称「奥州街道」と呼ばれる道である。近世以前は「奥大道」とか「鎌倉街道」と云われていた。中世初頭、この道沿いに「古多橋駅」（『小山市史』）という「宿駅（宿場）」があった。場所は特定されていないが、栃木県立博物館の図録『下野の鎌倉街道』（平成31年発行）に「下野の古多橋駅（宇都宮市下河原町）」とある。

同市下川原町の道路沿いにかつて湧水地があった。それを示す「亀井の水」と書かれた標柱が立っている。現在、岩石で囲われた小さい池がある。江戸時代に書かれた『下野風土記』（著者不明、佐藤行哉校訂、昭和33年栃木県郷土文化研究会発行）は「亀井水」（亀井の水）を「古多橋ノキワ也、往古ヨリ名水也ト云伝タリ」と書いている。「駅」の字はないが、文面から「古多橋駅」は「亀井水」に隣接してあった、とみることができる。佐竹氏はこの「古多橋駅」で奥州合戦に向かう源頼朝の軍に従軍、臣下の礼をとった。しかも、この時、佐竹氏の「五本骨扇に月丸」の家紋が誕生した。佐竹氏にとって忘れることができない場所である。

敗退後も常陸国に  
「佐竹一党三千余騎」

治承4年（1180）、佐竹氏は、源頼朝に金砂合戦で敗れ、常陸国と陸奥国の国境沿いの花園に落ち延びた。敗退後の佐竹氏の動静を伝える記

述が公家、九条兼実の日記『玉葉』にある。合戦から半年後にあたる治承5年4月21日条に常陸国から上京して来た下人の話として「佐竹ノ一党三千余騎、常陸国ニ引キ籠リ、其ノ名ノ思ニ依リ、一矢射ルベシノ由云々（以下略）」と書いている。「其の名ノ思」とは、源氏の血を引く名族としての佐竹氏の誇りを指している、とみられる。『玉葉』の記述から敗れてもなお意気軒高な様子がかげえる。

ところで上記の記述で注目される点がある。「三千余騎」の佐竹氏郎等が「常陸国ニ引キ籠リ」という下りである。鎌倉幕府が編さんした『吾妻鏡』は「秀義奥州花園城ニ赴ノ由」とし、金砂城から落ち延びた先を陸奥国花園城としている。花園城は常陸国と陸奥国の境にあった、と考えられるが、この『玉葉』の記述から判断すると、佐竹氏は「常陸国ニ引キ籠リ」とあるように常陸国内に戻ってきている印象を受ける。金砂合戦後、佐竹氏が支配していた常陸国北部の「奥七郡」は、戦いに勝った頼朝の部下たちに恩賞として分け与えられた。そこで「一矢報いる」となると、再び戦となる。しかし、この時代に「奥七郡」で合戦の記録や資料は見つかっていない。佐竹氏はまるで歴史から消えたかのように静まりかえってしまった。

## 佐竹氏、平家の後ろ盾を失う

その佐竹氏が金砂合戦から9年の歳月を経て歴史に登場してきた。文治5年（1189）7月、源頼朝は奥州平泉の藤原泰衡討伐のため鎌倉を発進した。同月25日、下野国（栃木県）の古多橋駅に到着。宇都宮二荒山神社に参拝し、勝利を祈願した。翌26日、出発しようとしたところになんと佐竹秀義が現れた。『吾妻鏡』に「佐竹四郎常陸国ヨリ追イテ参ジ加ワル」とある。金砂合戦から9年目、『玉葉』の治承5年の記事から数え

ると8年目にして佐竹氏は再び、歴史の表舞台に登場してきた。しかも「佐竹持タシム所ノ旗、無文の白旗」で、「御旗の白旗ト等シ」だった。これをみた「二品＝源頼朝」は「之ヲ咎メ」、「御扇ニ出月ヲ賜ワレタ」。五本骨扇に月丸の佐竹家紋誕生の瞬間だった。

秀義の父隆義は、金砂合戦当時、朝廷警護のため京都にいた。江戸幕府編さんの『寛政重修諸家譜』は隆義を「治承4年8月平相国清盛の執奉によりて五位に叙し常陸介に任ず」と記す。この叙任を江戸時代に秋田・久保田藩が編さんした、『佐竹家譜』は、「蓋、頼朝に抗せしめる」ための「術」ではないか、とみる。それを策した平清盛は金砂合戦の翌年、養和元年（1181）に没し、隆義も寿永2年（1183）に亡くなった。壇ノ浦の戦いで平家が滅亡したのは文治元年（1185）のこと。「保元・平治の乱」で平家に味方し、平家政権樹立に加担してきた佐竹氏は、既に後ろ盾を失っていた。同じ源氏の頼朝につくしか道がなかった、といえる。その決断を公にした場所が古多橋駅であった。

## 鎌倉で御家人暮らし始まる

奥州平泉の藤原泰衡を滅ぼした源頼朝は、建久元年（1190）、念願の上洛を果たした。『佐竹家譜』は「時に秀義、武田太郎信義、遠江四郎と三騎先陣の随兵に列す」と記す。建久2年には「常陸国より鎌倉に至り、頼朝に謁し」とある。この頃から秀義は鎌倉に住み始めたようだ。翌、建久3年（1192）、頼朝は征夷大將軍に任じられた。いわゆる鎌倉幕府の成立である。秀義は以後、將軍家直屬の家臣である御家人として鎌倉で暮らすことになった。

鎌倉の佐竹屋敷は江戸時代に書かれた地誌『新編鎌倉誌』（白石克編、平成15年汲古書院発行）に「名越道ノ北、妙本寺ノ東ノ山ノ疇アリ、其の下ヲ佐竹秀義ガ舊宅ト云」とある。『佐竹家譜』は佐竹屋敷の広さを「花谷と名越の間に六千坪」と書いている。屋敷は1万9834平方丈、約2畝の規模を有していたことになる。現在の鎌倉市大町3丁目にある佐竹氏ゆかりの大寶寺は、この佐竹屋敷跡に建っている。境内には家祖源義光の供養塔もある。秀義はこの屋敷に住みながら頼朝の上洛などに随兵として付き従っていた。

## 秀義は「常陸国」のどこから来たのか

ところで、藤原泰衡討伐の奥州合戦で秀義に従った佐竹氏郎等は、合戦終了後、どこにいったのであろうか。主人が住む鎌倉の佐竹屋敷は2畝弱で、多くの家臣（郎等）を抱えられない。『玉葉』は金砂合戦1年後に「佐竹ノ一党三千余騎、常陸国ニ引キ籠リ」と書いた。しかし、これら佐竹一党の動静に関する記述は、これまでみてきた資料からは、うかがい知ることができない。秀義は、鎌倉幕府成立の1年前、建久2年（1191）に「常陸国より鎌倉に至り」（『佐竹家譜』）とある。ここで云う「常陸国」とは、どのあたりを指しているのであろうか。

秀義が所領としていた「常陸国奥七郡并太田、額田、酒出等」（『吾妻鏡』）は、金砂合戦の敗北により源頼朝に没収され、「行軍の士」に恩賞として分け与えられた。従って『吾妻鏡』の記述通りならば、秀義が戻る場所はないことになる。しかし、秀義は「常陸国より鎌倉に至る」し、「古多橋駅」の時も「常陸国ヨリ追イテ参ジ」ている。これらの記述から表向きは頼朝配下の武将たちの支配地とされながらも、佐竹氏が実行支配していた地域があった、と考えられる。その地域の特定を含め、今後の解明が待たれるところである。

歴史ジャーナリスト  
茨城県郷土文化研究会会長  
富山 章一



湧水地の跡を示す「亀井の水」の標柱。「古多橋駅」の宿場はこのあたりにあったとみられている＝宇都宮市下河原町（筆者撮影）